

まえがき

本書は、「近代都市と絵画」というタイトルが示すように、「都市」と「美術」の関連性について考察した論集で、ここでは十九世紀後半から二十世紀にかけて見出せるパリからニューヨークに至る一連の美術の流れを、二つの都市を基盤にとりあげている。

*

近代美術の歴史をみると、近代都市の成立とともにあったといえる。

フランスでは十九世紀後半、第二帝政から第三共和政にかけて、ナポレオン三世のもと進められたパリの大改造が、新しい都市の姿を生み出し、創造されたばかりの近代都市の情景とそこでの市民生活は、画家たちの多彩な着想源となった。パリでは折しも、レアリスムから印象派、ポスト印象派の画家たちが活躍していたが、彼らはもとより、世紀末から二十世紀初頭の画家たちに至るまで、都市は新しい画題を提供する宝庫となっていた。その意味でこの時

代のフランス美術は、パリという都市と密接に結びついているといえよう。二十世紀初頭、同様にアメリカでは、建物の高層化など都市開発が急速に進むなかで、ニューヨークを主題にした一連の絵画が生み出されている。都市風景を描いたアメリカの画家たちの多くは、十九世紀から二十世紀にかけてフランス美術を少なからず参照しており、これらの画家たちを通じてパリからニューヨークへと都市に関わる表象は引き継がれ、アメリカで新たな展開をみせた。さらに都市と美術の関係は二十世紀半ばから後半にかけて、アメリカの前衛芸術においても認められ、都市は芸術創造と深く関係してきた。

本書の各論者はこうした点を踏まえ、都市自体の表象だけではなく、人々の生活、芸術家の交流なども含め都市と芸術に関わるさまざまな問題を幅広く扱っている。すなわち、都市の創造に関連し、都市社会がもたらした視覚的要求、美的感性、ライフスタイルなどを、芸術作品のなかに見出そうとしたものである。構成としては、一連の美術史的な流れ、および、近代都市の成立時期を考慮して、前半ではパリを、後半ではニューヨークを扱い、パリからニューヨークへとその流れがわかるようにしている。また七人の執筆者が自身の専門とする領域を対象に、関連する作品をとりあげた論考から構成される。以下、各章について簡単に紹介しておこう。

第一章、「印象派のパリ——モネ、ルノワール、カイユボットらが描くオスマンのパリ」（坂上桂子）は、近代都市パリの成立と芸術の初期の関わりを示す本書の基盤となる論考である。ここでは印象派の代表的画家モネ、ルノワール、カイユボット、ピサロらが描いたパリの情景をとりあげ、オスマンのパリ大改造により整備された都市インフラを、画家たちが近代生活の舞台としていかに興味をもつて捉えているかを検討する。印象派の美術を、近代都市が生み出した新しい芸術として捉え、その主題と様式に都市との関連性を見出している。第二章、「無秩序なるパリ——ピエール・ボナールのクリシー広場」（吉村真）は、ナビ派の画家ボナールが繰り返し描いたクリシー広場の主題をめぐり、ていねいに考察したものである。本論はボナール論としてはもとより、広場という、オスマンのパリの都市計画において重要なポイントだった場所をとりあげており、パリの都市表象に関する一考察としても興味深いものとなっている。第三章、「モリス・ドニとパリ——二十世紀の公共建築装飾にみる都市」（森万由子）は、同じくナビ

派の画家ドニの壁画を扱ったものである。ドニはボナールとは異なり十九世紀には都市風景を描かなかったが、二十世紀になって公共建造物を装飾する作品のなかでパリのモチーフを多く描いた。本論ではこれらの作品を分析することから、ドニの新たな芸術的関心として都市の表象を明らかにしようとしている。第四章、「マリー・ローランサンとパリの外国人コレクターたち——収集家の動向から読み解く画家の魅力」(由良茉委)では、ローランサンをめぐる、二十世紀初頭のパリの豊かな芸術的背景を見出すことができる。ローランサンは美術史の文脈のなかでこれまで十分論じられてこなかったが、本論では、ピカソらキュビストとの交流、外国人コレクターによる評価など、国際都市パリならではの文化的背景が読み取れよう。

第五章、「ニューヨークの表象——パリからニューヨークへ」(坂上桂子)は、十九世紀末から二十世紀初頭におけるニューヨークの都市表象についての論考である。ここではパリからニューヨークへ、つまりフランスからアメリカへの、都市表象の伝播とそこからの展開を考慮し、ハッサム、スローン、グラッケンズの代表的画家三人を取りあげ検討している。フランス美術の受容からアメリカ独自のアイデンティティの表現の確立までを、彼らの作品のなかに見出す。第六章、「ジョージア・オキーフ作《ラジエター・ベル——夜、ニューヨーク》についての一考察——一九二〇年代の芸術家の交流を手掛かりとして」(玉井貴子)は、二十世紀にニューヨークを多く描いた代表的画家であるオキーフを中心にとりあげた論考である。本論では、オキーフの都市を描いた作品を検討し、さらにその作品をめぐる、写真家スティーグリッツら、当時の前衛芸術家たちの交流関係にも目が向けられている。第七章、「岡田謙三の『抽象』——パリとニューヨークの経験を中心に」(菅田あゆみ)は、パリとニューヨークの両都市で描いた日本人アーティストについて考察したものである。ここでは具体的作品とともに画家自身の言葉にも着目し、東京も含め三都市での体験が、画家の芸術創造といかに関わっているかを捉えている。第八章、「河原温(Today)シリーズの再考——一九六六年の《ジャーナル》の読解をつうじて」(梶田倫広)もまた、戦後ニューヨークで活動した日本人アーティストをとりあげたものである。ここでは河原温の代表作《Today》シリーズについて、関連する資料をていねいに考察し、河原によるこの代表作が単に「作家が生きた証」としてだけでなく「ある種の都市表象のように」捉

えられる可能性を論じている。

*

コロナ禍で世界の各都市から人々がいなくなった風景はいまだ記憶に新しい。

都市とは何か。人口過密な都市に生きる現代の私たちにとって、人が消えた都市ほど、都市の意味を考えさせるものはなかったといえよう。本書は近代都市の成立時から現代に至るまでの状況を芸術を通して考察するものだが、コロナ禍を経て、変貌を迫られる都市におけるさまざまな問題について、美術を超えて、幅広く思いを巡らせ、考えるきっかけとなれば幸いである。

坂上桂子